

長期研修の重み

センターの門をくぐる時、研修員は、自分が学校現場から離れる意味を実感します。日常との距離感が、それぞれの心に「教育とは」という問いを投げかけるからです。教育改革の成否は、まさにこの部分に集約されるといいかもしれません。

今年センターが迎えた長期研修員 12 名は、教育改革はもちろんのこと、組織改編という大きく揺れる波の中で研究をすることになりました。

「県版カリキュラム」「特別支援教育・生涯学習推進センター」「進路支援とシラバス」そして「あすなる学習室」「高校生ものづくりセミナー」など新しい視点での教育が次々と展開され、それぞれの研究に拍車を掛け、また、プレッシャーとなって襲い掛かり、その方向性を揺らします。

その意味で、今年度の研修員は、特に課題設定に時間が掛かったようですし、また、意識的に掛けていたようにも思います。

「学校づくり」が教育改革の中で、新しいキーワードとして受け取られるようになって、センターの、情報発信基地としての役割の重要性が増しています。そして多くの情報が、学校現場に落ち着きと信頼を取り戻し、改革の成果に繋がることとなります。12 名の研究にも「情報の質が問われる」という言葉の重み加わって、それぞれが「読める研究」になっていると思います。

各学校においては、これらの研究が、本当に自分の学校の「学校づくり」に役立つかという厳しい視点で読んでいただければと思います。それが 12 名の「教育とは」という問いかけの評価にも繋がります。

研究の途中、それぞれの関係の学校、先生方には多大なご迷惑をおかけしましたが、ここにお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

静岡県総合教育センター 所長 天 野 龍 生